

ART KISS

LETTER Vol. 63

2013 盛夏



宮本和奈さん

田中慶さん・石渡愛子さん
(アトリエオモヤ)

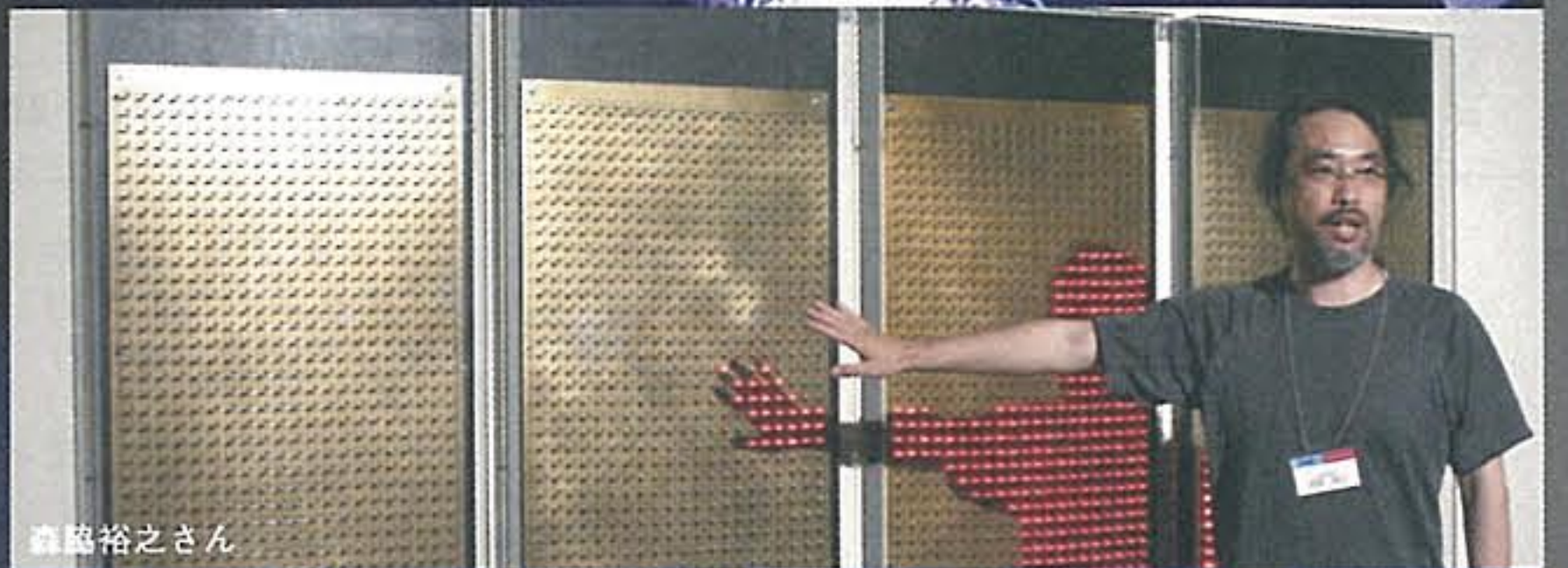
児玉幸子さん



緒方壽人さん



的場やすしさん・徳井太郎さん



森脇裕之さん



近森基さん

巻頭言

メディア・アートと自然

メディア・アートは、高度なテクノロジーを駆使するコンピューター・アートであり、従来のアートが個人の表現であったのに比して、アーティストや技術者のコラボレーションによるクールな造形が特徴となつていきます。それは先駆となるコンセプチュアル・アートにつながると思なされますが、メディア・アートはむしろ舞台芸術に近いと言えましょう。多様な人間と高度のテクノロジーが関わり、仮想空間を創り出すという意味でも演劇的であります。とりわけ双方向芸術であるインタラクティブ・アートは、今まで静かであった作品との関係性が、観客が舞台(展示スペース)に上がることにより基本的に変化し、力動感にあふれるものとなります。一九六〇年代の「ハプニング」と異なり、より深い影に踏み込み、より鮮やかな光を浴び、色彩の躍動を経験します。今回の熊本市現代美術館で開催されている「魔法の美術館」展で見られるように、大人はもちろん、積極的に参加し興奮する子供たちも、心の中に何かが起こっているのを窺うことができます。まるで芝居を観て、実際それに参加してしまったように。これは美術教育上でも新しい現象であり、今後優れた成果を上げるものと想像させます。

そしてこの新しいアートは、チームの制作であると同時に、やはり最終的には個の表現であり、デジタルとアナログの世界を振り子のように揺れ動いていることに気づきます。徹底した電子制御の作品の一方で、観客が通過するときの風で動く小松宏誠の鳥の羽の秀逸な作品があり、模範機関車の光が生み出すクワクボリヨウタの幻想的な影絵の世界があります。しばしばメディア・アーティストは、新しいメディアの探求を進めていくある段階で、デジタル指向から翻ってアナログ世界や自然に方向性がシフトすることがある、と語ります。メディア・アートは、電子テクノロジーを突き詰めた時、非人間性や反自然ではなく、人間性や自然に立ち返る傾向のあることに興味を引かれます。

熊本市現代美術館館長 桜井武

MUSEUM INFORMATION

2013 MAY-JUL

いのちの花壇植え替え

2013.5.28

熊本支援学校の皆さんと花壇の植替えを行いました。今回の花は、ブコウソウ、朝顔、マリーゴールド、ペチュニア、アゲラタム、ジニア（百日草）などです。小雨の降る中、一生懸命皆で作業し、スムーズに活動することができました。どうぞ皆さんご来館の折には、夏のステキな花壇を見てくださいなね。(A・S)



第19回お話し玉手箱LIVE

2013.6.23

本田史郎さんと福島絵美さん(RKK)による朗読会「お話し玉手箱」が開催されました。今回の演目は、落語絵本の「ばけものつかい」、熊本の牛深の伝説のお話「たこの足」、そして芥川龍之介の「トロッコ」。笑いあり、謎あり、青春ありのお話が、本田さんと福島さんの息びつたりの朗読によって心にスッと入り、オーディエンスの皆さんがお話に引き込まれていく様子が伝わってきました。さらに、今回は「たこの足」にちなんで、心憎い演出も！熊本在住の造形作家の Saito



さんが制作した、お話に登場するおばあさんとたこの足の立体が、朗読の間、ホームギャラリーに展示されました。(A・A)

【参加人数80人】

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

テーマ「天草」

2013.5.23

第114回のテーマは「天草」。飛び入りの方3名を含めた14名が詩作を発表しました。

崎津海岸、海や磯の香り、ポンポン船や釣りの様子を表現したものから、天主堂や天草四郎、陣中旗、キリシタンの歴史、そして白い陶石、五足の靴や北原白秋まで、天草の魅力と歴史を多様に表現する内容でした。発表者のなかには、天草出身の方もいて、天草の思い出の花、「はまゆう」「ひがなばな」「つわぶき」などを詩に詠み入れながら、天草弁をアクセントに使う色鮮やかな印象の詩作を発表されていました。



地元の身近な場所にこそ、気づかないだけで、大きな魅力が潜んでいることをしみじみと確認する機会となりました。

当日は、市民の継続的文化活動ということで、くまもとケーブルテレビの取材が入り、発表者の皆さんは少々緊張しながらも晴れやかな様子でした。(H・T)

【参加人数14人】

テーマ「交叉点」

2013.6.27

第115回のテーマは「交叉点」でした。過去最高の20名（飛び入り3名含む）の方が発表されました！スクランブル交差点の描写から、人生が交差する様子を見ること、小学生の自分が学校までいく

間の交差点の様子を、50年たつてたどって見たときの時の経過を感じるなど、情景が思い浮かぶような詩がたくさん発表されました。また、自分の道は自分で探すという強い決意を感じる詩もありました。(N・H)



【参加人数20人】

テーマ「光」

2013.7.25

第116回のテーマは「光」でした。14名の方が詩作を発表しました。

太陽がふりそそぐ光や、燃える火の光、星の瞬き、希望の光、人工の光など様々な光がありました。その一つ一つが輝きも違えば、温もりや色さえも違い、どの作品からもその存在感が際立ちました。「光」は、私たちの生活に欠かせないものです。改めて言葉にするとその大きな力を感じずにはいられません。発表者の中には、この詩の朗読会が自分の光だと発表してくれた方もおり、会場がほっこりと温かな気持ちになりました。(N・H)



【参加人数14人】

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・18時より 無料

上映リスト(5/20 ~ 7/31)

5月20日「審判」	1963年	フランス、イタリア、西ドイツ映画	118分
5月27日「命のピザ」	1992年	日本映画	115分 *日本語字幕付き
6月3日「青空に踊る」	1943年	アメリカ映画	89分
6月10日「僕と彼女とオーソン・ウェルズ」	2008年	イギリス映画	114分
6月17日「グランド・ホテル」	1932年	アメリカ映画	112分
6月24日「恐るべき子供たち」	1950年	フランス映画	100分
7月1日「ニューヨーク、狼たちの野望」	2008年	アメリカ、フランス映画	97分
7月8日「花咲ける騎士道」	1952年	フランス、イタリア映画	100分
7月15日「王子と乞食」	1977年	イギリス、アメリカ映画	116分
7月22日「廿日鼠と人間」	1939年	アメリカ映画	106分
7月29日「ローレル&ハーディの天国「入道中」	1939年	アメリカ映画	68分

CAMKEESの活動

美術館ボランティア
CAMKEES(キャンキース)による活動紹介

CAMK「読みがたり」第46回
テーマ「あめふり」

朝からの雨にも関わらず、長靴を履いた元気なお友達がたくさん集まってくれました。テーマは「あめふり」。絵本は両音が心地よい『ぴっちゃん ぼつちゃん』、力強い絵について見入ってしまう『がんばれまけるな ナメクジくん』をご紹介しました。他にも、手袋人形を使って「カエルのうた」を輪唱したり、大型絵本『びよーん』で一緒にジャンプをしたりと、体を動かしてあめふりの日を楽しみました。(Y・M)



2013.6.15

【参加人数45人】

CAMK「読みがたり」第47回
テーマ「夏休み」

今回もおなじみの手あそび「あたまかたひざポン」から楽しく始めました。

絵本「ちいさなヒッポ」をはじめ、『うしろにいるのはだあれ』、『でんしゃのつて』、『だんごむしの



2013.7.20

ころちゃん」をご紹介しました。パネルシアター『ふしぎなトンネル』では、乗り物がトンネルを通るたびに、新しい乗り物へと変身する様子に、親子そろってくぎづけでした。暑い日でしたが、たくさんのご参加をいただき、大盛況の会となりました。(K・O)

【参加人数52人】

ミュージック・ウェーブ

展示会や季節にあわせたコンサートを開催しています

STREET ART-PLEX KUMAMOTO
GREAT COMPOSER MEMORIAL
SERIES J.S.バッハ2013

2013.7.27

バッハの命日にちなんだメモリアルコンサートが開催されました。出演者は、小学生から社会人までバッハをこよなく愛する皆さんと、ゲストに大村友樹さん(フルート)、竹内美世子さん(フルート)、吉田秀晃さん(ピアノ)をお迎えしました。「トッカータとフーガニ短調BWV565」や、「主よ、人の望みの喜びよ」BWV147、「トリオ・ソナタ長調BWV1029」などの曲目が披露され、バッハの曲を身近に感じることができたよ



【参加人数90人】

STREET ART-PLEX KUMAMOTO
JAZZ OPEN 2013

2013.7.27

ストリートアートプレックスとの協働事業として、バッハメモリアルコンサートと同日、「ジャズ・オープン2013」が開催されました。熊本の夏恒例のこのイベントは、熊本市中心市街地全7箇所で開催され、熊本市現代美術館では、豊田隆博Trio+藤本直子と、林隆行Trioの2組が演奏して下さいました。豊田隆博Trio+藤本直子の心地よい音と艶やかな歌声、林隆行Trioの息の合った演奏に会場からは鳴りやまない拍手が贈られました。(Y・M)



【参加人数120人】



ホームギャラリーからのお便り
おすすめの一冊をご紹介します。

VOL.17

「スウィング！」



著者:ルーファス・バトラー・セダー
翻訳:たに ゆき 出版:大日本絵画
2009年

これまで、これほどページをめくる速度に慎重になる本に出会ったことはありませんでした。見た目は、ちよつと分厚いくらいで何の変哲もない絵本です。しかし、ページをめくり始めた途端、絵本の中の子どもたちが息を吹き返すのです!

「スウィング!」は、大人も子供も楽しめる、新感覚しかけ絵本。しかけ絵本といえは、飛び出す絵本が有名ですが、こちらはアナログな動画を楽しむ絵本です。アナログと聞いて、侮ることなかれ。思った以上に滑らかにエレガントな動きを楽しめます。

その仕組みは簡単。ページに挟み込まれた一連の動きを分割した絵が、ページの開閉に合わせて縞々の下をスライドすることにより、動画のように見えるというもの。

このようなアニメーションの歴史は古く、数百年前からあるようです。まるで古い映画を見ているかのような懐かしさ。動画に慣れた現代の私たちの目にも、きつと素直な驚きを与えてくれるはず。ぜひ手に取ってささやかなアニメーションを楽しんで下さい。

もちろん読書の後は、最後のページに書いてある通り。

「さあ、そとにでておもしろいからだをうごかそう!」(K・O)

ぼくもメーヴェに
乗ってみたいなー!



MUSEUM INFORMATION

GI GII

「来た、見た、クマモト！」展

八谷和彦アーティストトーク

2013.6.8



八谷和彦さんによるアーティストトーク「Open Sky プロジェクトについて」を開催しました。

当館所蔵作品《メーヴェ 1/2》(2003)は、2003年に開催した展覧会「Open Sky」に新作として発表されたものですが、今回のトークでは、現在まで続くこの10年間のプロジェクトの進展について様々な初公開映像を交えながら、じっくりお話いただきました。

これまでのテスト機の飛行実験の映像は、まるで現場を共有できたようなわくわく感がありました。また、八谷さんがご自身で最新機を実際に飛ばすことを目的として行い続けてきた、様々な飛行のトレーニングの映像も、「空を飛んでいる時ってこういう景色なんだな」という、八谷さんとともに飛んでいるようなときどき感を呼び起こさせるものでした。

講演会場内の大人たちが目をきらきらさせて聞き入る様子がやはり印象的で、この今現在の「わくわく」と「ときどき」、つまり未来への夢が開かれていく瞬間を共有する楽しさと高揚感が、八谷さんの作品の重要な特徴のひとつであると改めて実感する場となりました。(H・T)

【参加人数50人】

ヤノベケンジ 《アトムカー》試乗会

2013.6.2
9/16/23



「来た、見た、クマモト！」展会期中の毎週日曜日に、出品作品のヤノベケンジさんの《アトムカー》の試乗会を行いました。各回5名ずつ、計4回の試乗会に20名の方が試乗されました。《アトムカー》とは、ガイガー・カウンタ搭載で、空気中にある放射線を10回感知したら止まる自動車です。はじめに《アトムカー》についての説明があり、その後、試乗を行いました。前進と後進の両方を体験しました。車を運転するのと似た要領ですが、視界が狭いので少々難易度の高いものでしたが、参加者のみなさんはスムーズに運転され、笑顔で体験されていました。また、その場に居合わせた方々が《アトムカー》の動く様子に、足を止めて見入っている姿も印象的でした。(N・H)

【参加人数20人】

「来た、見た、クマモト！」展 プレママ&ファミリーツアー

2013.6.8



「来た、見た、クマモト！」展のプレママ&ファミリーツアーを行いました。6グループの皆さんと一緒に展示をまわりましたが、小さなおともだちと一緒に、日比野克彦さんの《いくさいぐさ》にゴロンと寝転んだり、ヤノベケンジさんの《アトムカー》の中を覗き込んだり、興味深々のツアーとなりました。最後に安本亀八の《相撲生人形》と記念写真。たくさん作品と一緒に見てまわり、盛りだくさんの内容となりました。(A・S)

【参加人数17人】

中心商店街を 対象としたナイトツアー

2013.6.7



上通・下通・新市街の商店街の皆様を対象とした展覧会ナイトツアーを開催しました。

奈良美智展より開始したこのツアーですが、「この機会を利用して初めて美術館にきました」という方や、前回もご参加いただき、今回は誘い合っただけで来館いただいた方もいました。お仕事後のひと時に、担当学芸員によるトーク付きで、「来た、見た、クマモト！」展を

楽しくご覧いただけました。商店街の方々と当館との交流の場として、今後も継続の予定です。(H・T)

【参加人数20人】

「似木絵、どうですか？」

2013.6.22

「来た、見た、クマモト！」展関連イベントとして、鈴木淳さんによるアートイベント「似木絵、どうですか？」が行われました。このイベントは、鈴木淳さんがお客さんの「似顔絵」ならぬ「似木絵」を描き、お客さんとの会話や雰囲気から感じ取った印象を木で表現しようというものです。

鈴木さんお手製の木の下にビニールシートを敷いて、会場はのんびりピクニックのような雰囲気。「自分はどんな木かな...」ドキドキして待つお客さんでしたが、「はい！できましたー」と渡された似木絵を見ると、にっこり笑顔がたくさん見られました。19名の方が参加され、1人につき約20分かけてじっくり描いていただきました。予定時間を超える大盛況のイベントとなりました。(K・O)

【参加人数19人】



CAMKレクチャーカレッジ
CAMKコレクション、
この10年をふりかえる

「CAMKコレク

ション、この10年をふりかえる」と題して、当館収蔵作品からなる今回の展覧会についてお話ししました。

00、01年のプレイ

ベントから、昨年度の奈良美智展まで、当館のG1、2のメイン展示室で開催した企画展を10年分振り返りながら、その企画展を機に収蔵し、本展で出品している作品についてご紹介しました。メイン展示室だけでなく、G3での小企画展を機に収蔵・出品している作品を多々ありますので、G3企画展の10年間分もあわせて、スライドショーで振り返りました。

スライドショーの合間に、八谷和彦さんの《メーヴェ1/2》の飛行実験の映像や、日比野克彦さんの《いくさいぐさ》、《トール》の制作者(伝統工芸士)インタビュー映像、安本亀八の《相撲生人形》組立映像などを紹介しました。

様々なアーティストたちと、様々なタイプの展覧会を開催するなかで、アーティストたちの提案によって、新作制作の現場を通じて多くの人々とながたり、熊本の伝統工芸とその担い手達を再発見したり、現代美術館という場所がより多様な文化の交流の場となったりと、常に市民の皆さまが楽しみ・新しい出会いを経験する場として美術館が変化し続けているその軌跡もご確認いただきました。



2013.6.16

当館のコレクションについて、美術館史とともに話したレクチャーではありましたが、企画展や、アーティストが市民とともに作品制作を行う場など、様々ななかたちで市民ひとりひとりの人生と寄り添いながら、収蔵作品と美術館が時を過ぎるに至ることも、当館の重要なコレクションのひとつであることを改めて確認する機会となりました。(H・T)

【参加人数50人】

CAMKレクチャーカレッジ
美術館とメディア・アート

「魔法の美術

館」展のレクチャーカレッジを実施しました。



2013.7.6

今回は「美術館とメディア・アート」というタイトルで、メディア・アートになじみの薄い方にもわかりやすいよう、美術館との関係を中心にひもといていく内容でした。

はじめに、メディア・アートの特質を「インターフェイス」「インタラクティブ」「身体性」というキーワードで解説。その他、国内外で行われる様々なメディア・アートフェスティバルや、熊本市現代美術館の収蔵品、そして魔法の美術館の参加作家の作品を紹介していく流れとなりました。展覧会開催初日に、「メディア・アート」のイロハを学ぶ機会になっていただけたとすれば幸いです。(A・S)

【参加人数40人】

うわさうちわワークショップ

@碩台小学校、城東小学校、壺川小学校



2013.7.9 / 10 / 11

上通×CAMK×山本耕一郎「うわさプロジェクト」。今回は「上通うわさまつり」に登場する熊本のひみつを描いた「うわさうちわ」を作るワークショップに近隣小学校3校(碩台小、城東小、壺川小)の子ども達が参加してくれました。それぞれの学校で、子ども達の目線で見えた熊本のひみつをうちわに描いてもらいました。熊本城やくまモン、スイカなど熊本を表す代表的なものから、普段遊んでいる公園やお店の紹介など子ども達の身近な情報まで、思い思いに描かれたオリジナルうわさが完成。出来上がったうわさは329枚すべてがゆかた祭期間中、上通の「うわさ屋台」に飾られ、賑やかな屋台となりました。(N・Hi)

【参加人数329人】

上通うわさまつり

「うわさ」や「ひみつ」を使って、「街」と「人」をつなぐアートイベントを日本各地で行っているアーティスト



2013.7.13-14

の山本耕一郎さん。今回は、毎年恒例の「ゆかた祭」に合わせ「うわさまつり」を行いました。近隣の小学生にくまもとのひみつを描いてもらった「うわさうちわ」や「うわさみくじ」、「うわさバッジ」屋台が上通に登場し、浴衣姿の子どもたちが嬉しそうに自分のうわさを探している姿が微笑ましいイベントとなりました。(E・Z)



みんな思い思いの
作品ができたね!



G III

ギャラリーIII(G III)は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

神野大光展 アーティストトーク&ワークショップ
「篆刻」を楽しむ

2013.5.25



「神野大光」展の関連イベントとして、アーティストトークとワークショップを開催しました。アーティストトークでは、神野大光さんに書や篆刻作品についてお話をいただきましたが、神野さんの作品に対する想いが伝わってきて、多くの参加者が書と篆刻の自由な世界に浸っていました。時には笑いもあり終始和やかなムードでした。

ワークショップ「篆刻」を楽しむでは、篆刻技法をレクチャーしていただきました。今回は、約1・5センチ角の石材を使い、彫る面を紙やすりで均一に整えることから始まりました。単純な作業に見えても、とても難しく、経験を積んで技術だと実感。文字は、名前の一字などを篆書や隷書の手本から選び、線



を太くしたり細くしたりしてオリジナルデザインを考えました。印刀で彫ると、コリツ、コリツと石の音が鳴り、耳に心地よく響き、初めてという方でも躊躇することなく黙々と彫り進めていく姿が印象的でした。朱肉を付けて押された印は、味わい深いものばかり。完成作品は、G3入口に会期中展示しました。(N・Hi)

【参加人数/アーティストトーク45人 WS9人】

G III < OI 92
コーダ・ヨコ展 キオクの森から
2013.7.10-9.8

熊本県内外で精力的に活動している、コーダ・ヨコさんの展覧会が開催されました。63点すべて新作のこの展覧会のキーワードは「記憶」。会場入り口には新作の「記憶の樹」パネルが登場し、来場者が自分の記憶を残せるようになっていきます。静かに自分に向き合えるひとときを堪能してもらえ、空間になりました。(E・Z)

コーダ・ヨコ展
イロトリドリ
の鳥を作ろう
ワークショップ

2013.7.21



着なくなった服で自分だけの「イロトリドリ」の鳥を作るワークショップを開催しました。

包帯状に切った布を新聞紙で作った胴体に巻きつけ、色を塗ってボタンを付けたり、カラフルな布を使う子どもたちもいて、素敵な鳥がたくさんできました。

「元々モノづくりが好きなのですが、自分が愛用していた洋服を利用して大好きなトリを作れて、ますますモノづくりの楽しさにハマったようです」(アンケートより)(E・Z)

【参加人数46人】

Visitor's letter

来館者のみなさんからのメッセージ

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

CAMKコレクション vol.4

「来た、見た、クマモト!」展

- ・小学生の頃に見た作品があり、なつかしい思いだった。生人形が恐ろしいほどだった。(熊本市・10代・女性)
- ・熊本にゆかりのある現代作品がこんなにあるとはびっくりしました。(熊本市・60代・男性)
- ・5部門の中、それぞれ夢があり、想像の世界を展開されてくれました。(熊本市・60代・女性)

「魔法の美術館 -みんなで楽しむ光のアート-」展

- ・子どもが目をキラキラさせて楽しんでいました。「キレイだね～」と感動していて私もうれしくなりました。(熊本市・40代・女性)
- ・遊べたり、体験できる物が多く、とても楽しかった。光と影を使ったものがおもしろかった。(熊本市・10代・女性)
- ・体験できて、アートの一部になっている感じがよい。(熊本市・30代・女性)
- ・一番最後の作品が面白くて、自分で作ろうかなと思いました。(熊本市・10歳未満・男性)



ART DE GYAN

アート・どぎやん。

*熊本弁でアートはどのような?という意味です

第28回維熊篆会書法 篆刻展併催・米村静山個展

熊本県立美術館分館
熊本市中央区千葉城町2-18
TEL 096・351・8411



書家の平方研水さんが主宰する書展で、50人が篆刻や篆書、隸書の額や軸120点を展示していた。平方さんは「游雲驚龍」の篆書の大字とダイナミックな篆刻作品は、構図もさすがである。

米村静山さんの初個展も併催されていた。米村さんは書業60年と題して、篆刻、篆書、隸書をはじめ、

2013.6.11-16

第17回書範選抜書道展

2013.7.17-21

熊本県立美術館分館

書道誌「書範」の中から選ばれた101名の書作品展である。いろいろな書風やスタイルのある行草書が見られ、多彩な会場になっていた。江上蒼龍(主宰)さんをはじめ高田蒼石さんの大字行草書、平山翠石さんの「飲中八仙歌」の墨絵、島田洋翠さんの光晴の詩、竹下蘇峰さんの「臨濟録」、永田静汀さんのかな等が印象に残った。

主宰の江上蒼龍さんの古稀記念展も併催され、23点の小作品も展示されていた。一昨年の日本の書展出品作が特に秀作で、筆さばきのうまさも美しさに加味されていた。(S・K)



墨画、大字書、かな作品まで多彩な作品31点を展示していた。作品はいずれも誠実な書きぶりで、静謐で、生まじめな用筆が印象に残った。(S・K)

SHIZUKU

2013.6.26-7.1

アートスペース大宝堂
熊本市中央区上通町5-6
TEL 096・354・2155

上通にある陶芸教室「陶芸と文化の森」の講師5人による陶と銀のグループ展。「雨」をテーマに5人それぞれ

のスペースと、5人の作品が波紋のように二重の円をなして配置している展示があつた。それぞれ全く違う表現で、展示数も多く、個展とグループ展を一同に見ているような満足感があつた。高橋知江さん(陶)の「ミズダマリ」という作品は、水たまりが一点に集まって固まったものをイメージして作られたそうで、水風船のような形をした淡い青色に薄く水玉模様がついた愛らしい造形で、雨の時期でも涼やかな気持ちにさせてくれる雰囲気があつた。(N・H)



編集後記

この夏は「乗り物に興味を持つ」というテーマに、特急「A列車で行こう」を乗車体験してきました。昔ながらの港町のバーを思わせるカウンター、アール・デコ調の鉄フレーム飾り、ステンドグラス窓、蝶ネクタイを付けたバーテンダーさん、車両シートの美しい更紗柄、心地よいBGM、美味しい飲み物、そして美しい車窓の風景…。夕方の、三角、熊本間の1時間の旅でしたが、「もう少し乗っていたいな」という気分になるものでした。このような満足感を、当館でも、いつでも来館者の皆様に提供していきたい！と心を新たにしました。

編集長 富澤治子

夏の風物詩といえば、そうめん、かき氷、すいか、風鈴：うちわ！紙面でもご紹介した「うわさうちわ」の制作で、隣の小学校にお邪魔しました。夏の体育館はうだるような暑さで、この中で運動をしていたのかとわが身を疑うほどでしたが、うちわを仰ぐと、とても気持ちがよくまりました。うちわってすごいねとスタッフで言い合うほど。うちに描かれた子どもたちにとっての熊本は、近くの公園や水のおいしさなど、身近な宝物であふれていました。身近すぎて気づかない魅力ってたくさんあるのだと気づかされました。

担当 濱川倫子

「執筆後記」*原稿の文末にイニシャル表記

- 兼城昌山(書道家)(S・K)
- 藏座江美(熊本市現代美術館主任学芸員)(E・Z)
- 富澤治子(熊本市現代美術館主任学芸員)(H・T)
- 坂本顕子(熊本市現代美術館主任学芸員)(A・S)
- 芦田彩葵(熊本市現代美術館主任学芸員)(A・A)
- 濱川倫子(熊本市現代美術館学芸アシスタント)(N・H)
- 丸吉ゆかり(熊本市現代美術館学芸アシスタント)(Y・M)
- 平原奈津美(熊本市現代美術館学芸アシスタント)(N・H)
- 大田黒翔代(熊本市現代美術館学芸アシスタント)(K・O)

ART KISS LETTER アート・キッスレター
vol.63 盛夏号(2013年8月) 【無料】

発行人：桜井武
編集：富澤治子
デザイン：石井克昌(MOTOSHIKI)
印刷：シモダ印刷
発行：熊本市現代美術館
860・0845

熊本市中央区上通町2-3
電話 096・278・7500
ファックス 096・359・7892
<http://www.camk.or.jp/>

【次号は秋号(11月発行予定)】

次の展覧会

Welcome to the Jungle
— 熱々！東南アジアの現代美術 —

2013年
10月5日(土)～
11月24日(日)

WORLD NEWS

熱々!シンガポールつれづれレポート

アツアツ

いま、高い経済成長率と加速するグローバル化のなかで、世界から熱い注目をあびる東南アジア地域。そのほぼ中心に位置し、各地をつなぐ中継地点、ハブとして機能しているのがシンガポールだ。シンガポールと聞いて、まず思い浮かべるのはどんなイメージだろうか。マライオン、セントーサ島に、カジノや天空に浮かぶ巨大プール(図1)……といった常夏のリゾート地から、戦略的な金融ビジネス、海外資本の積極的な誘致や税制の優遇、さらには、人民行動党による政治体制、労働力と資源の問題まで、人それぞれだろう。



図1

共通している点があるとすれば、エンターテインメントとビジネスが共存し、豊かな物産と開発が著しい都市というイメージかもしれない。

まだ日本では肌寒い3月末、シンガポールを訪れた。一歩飛行機から降りれば、肌が瞬時に熱帯の国にやってきましたことを感じる。巨大な空港には最新の設備が配され、海外ブランドを取り揃えた免税店、ヴァリエティに富んだレストランエリア、広々としたリラクゼーションスペースが設けられている。その万全の設備と規模は、トランジットを重視した、まさに東南アジアの要となる国際空港であることを示している。

その一方で、帰国の際に気づいたのが、土産物はほとんど見当たらず、ローカリティーはかなり控えめだということだ。いや、むしろ、ローカリティーという言葉ではくくれないのが、この国の特質なのだろうか。

シンガポール共和国は、主に華人系、マレー系、インド系の住人から構成される多民族国家であり、主要な宗教は、仏教、道教、イスラム教、キリスト教、ヒンドゥー

教である。その地理的状況から辿ってきた歴史は複雑で正確な起源は判然としないが、19世紀以降はラッフルズ卿が上陸したのを機にイギリス領となり、第二次世界大戦下では日本の支配を受け「昭南島」と改名され、大戦後はイギリス領から独立し、マラヤ連邦に加わるものの、人種政策の問題でマレーシアとの関係が悪化、1965年に分離独立、現在に至っている。公用語は4言語(英語、中国語、マレー語、タミル語)で、標識や名刺、すべてに4言語が併記され、国民は英語と各民族語を教育される。国民のほとんどが住む公営住宅では、民族が偏らないよう部屋が割り当てられる。訪れた美術館でも、フロアごとに監視員の民族が異なるなど、多民族国家ゆえに国全体で徹底したバランス配置を心がけていることが窺われた。シンガポールは、建国50年弱という若い国であるが、中継地として古くより、様々な民族が流入し、繁栄してきた。また多くの国民が英語を話すという利点から、貿易地としてだけではなく、事業の拠点として、人々が訪れ滞在したりすることを目的に、人工的な観光資源開発に取り組んでいる。湾に浮かぶ多数の巨大タンカーや船舶の数、港に隣接する人工の巨大ツリー庭園の姿は壮観だ。

観光資源開発として、文化芸術面も重要な柱となる。国の成り立ちを紹介する国立博物館では、シンガポールが歩んできた歴史が紹介されている。2006年開館のこの博物館は、日本の博物館とは少し趣が異なり、観覧者には多言語対応の音声解説キットが無料で配布される。展示室に進むと、360度スクリーンとなった円形の部屋で、シンガポールが歩んできた歴史が映像で再現され

ていく(図2)。そこでは、博物館とは古代からの遺物である資料や文化財を公開する施設であるという認識を改めさせられる。また、1997年開館のアジア文明博物館では、その巨視的な見地からアジア各国の資料や文化財が公開されているが、興味深いのは、いわゆる常設展示室に、海外の他館のコレクションが展示されていることだ。つまり、自館のコレクションを、他国からコレクションを借用して補充しながら紹介するという考え方だ。これらの取り組みは、新しい博物館であるがゆえに、作品・資料の収集、管理、調査研究、公開という従来の博物館の在り方を、最新のテクノロジーと大胆なアイデアによって刷新した例といえるのかもしれない。



図2

国策として文化推進をかけるシンガポールでは、2006年より2年に一度、国をあげての大規模な国際美術展「シンガポール・ビエンナーレ」を開催している。第1回目と第2回目のアーティスティック・ディレクターは、森美術館館長の南條史生氏が務めた。第3回目ではカナダとオーストラリアからキュレーターを迎え、ディレクターはシンガポール人、主催がシンガポール美術館となった。第4回目となる今年からは、共同キュレーターとして同館のキュレーターチームが携わり、ハード・ソフトともにシンガポール人、そして美術館がより主体的に務める体制へと移行している。1996年に開館したシンガポール美術館(Singapore Art Museum)(図3)は、東南アジアとアジアの現代美術を収集し、積極的に海外の美術館との連携を図り、コレクションの紹介に努め、またこの夏には、パリのパレ・ド・トーキョーで展覧会を企画するなど、海外でもコレクション、キュレーション、そしてアーティスト

との幅広い人脈を示すプロデュース能力を発揮することにも意欲的だ。つまり、シンガポール美術館が価値の高いコレクションを誇り、かつ企画力に優れていることを国際的にアピールし、ブランドとして発信することで、シンガポール・ビエンナーレやシンガポール美術館に人々が訪れることにつながりようとしている。また美術教育にも力を注ぎ、アートを通して現代社会の諸相について考える「ラーニング・ギャラリー」を設け、学校や子ども向けプログラムを充実させ、幼い頃よりアートに親しむ土壌作りを努めている。私が訪れた時も生徒たちが見学授業に来ており、熱心しかしし気負いなく鑑賞を楽しんでいた(図4)。加えて、大統領を冠にかかげて、35歳以下の若手作家を紹介する企画展を定期的に実施し、新しい才能を発掘することに力を注いでいる。折しも訪問中に、優秀賞の発表と表彰式が行われていたが、大統領が自ら読み上げ、気軽に取材に応じる姿からは、国として現代美術をサポートする姿勢が強く伝わってきた。



図3

むろん、アートが広く認知され、国家的プロジェクトに発展するには、人材育成とマーケットが必要となってくる。シンガポールを代表する芸術大学であるラサール芸術大学は、いくつもの建築賞に輝いた斬新な校舎でも知られるが、複数のギャラリーを校内に抱え、多様なアートを発表、目にする場として機能している。その中のひとつでは、シンガポールの巨匠、タン・ダウの個展が開催されていた(図5)。マーケットの点では、海外のギャラリーの誘致にも努めている。英国植民地時代の軍用地跡ギルマン・パラックスを現代アート地区にするべく、世界10



図4



図5

ケ国以上のギャラリーが出店をしており、日本からは、小山登美夫ギャラリー、オオタファインアーツ、ミツマアトギャラリーが参加している。また場所は異なるが、ニューヨークにあったイッカン・アート・ギャラリーはシンガポールへと移転した。

2015年には、建国50周年を記念して国立美術館(National Art Gallery of Singapore)が開館予定で、現在、建設真最中だ。シンガポール滞在中は、どこにいても、夜間に工事の音がずっとしていたことが印象的だったが、この都市では、3年に一度はつのビルが建て替わるといふ。常に変化を求め、新しいトレンドを発信していくシンガポールの姿を目の当りにした。その一貫した姿勢には、国家を維持していくという強い覚悟が伝わってくる。

当館では今秋、熊本で開かれる第11回アジア太平洋都市サミット会議の時期にあわせて、シンガポール美術館協力のもと、「Welcome to the Jungle」熱々!東南アジアの現代美術展を開催する。本展では、急速に発展する東南アジアの都市の姿、複雑な歴史や境界のなかで共生する民族、彼らのルーツや美意識、価値観、そして政治や社会の問題など、この地域の「いま」を取り巻く状況を「ジャングル」に見立てて、東南アジア8ヶ国25組の作家による現代美術を紹介する。近年、東南アジアと日本の結びつきは、ますます深まっているが、これまで近くて遠かった国々の在り様に触れ、感じるだけでなく、それらを自らの状況と照らし合わせ、今後の日本の在り方についても考える場を創出できればと考えている。ぜひ、この秋、ジャングルさながらの熱気と密度に帯びた空間に身をおいていただきたい。(A・A)